

研究ノート

老年看護学教育プログラムが看護学生の 高齢者イメージ形成過程に影響する要因 (第1報) ～1年次から2年次における老年看護学授業前後の比較～



畑野 相子、北村 隆子、安田 千寿
滋賀県立大学 人間看護学部

キーワード 高齢者イメージ、看護学生、老年看護学、教育プログラム

I. 緒言

我が国は急激な速さで高齢社会を迎え、2025年には超高齢社会のピークがくと推計されている¹⁾。2006年度国民生活基礎調査によると、有訴者の状況は、65歳以上では約半数となっている¹⁾。通院者率は、年齢が高くなるに従って上昇し、65歳以上では6割以上の者が通院者となっている。2007年患者調査によると推計入院患者数は146万人で、年齢別にみると65歳以上が約6割を占めている。このような社会背景の中で高齢者への看護はますます必要性を増している。

老年看護の専門性は早くから存在していたが、老年看護学の歴史は約20年とまだ浅い²⁾。1950年以前は結核や感染症が死因の上位を占め、急性期看護が老年看護よりも重要視されていた。歴史的にみると、アメリカでは1960年頃から老年看護を専門領域と見なす動きが始まった。我が国における老年看護の専門性が着目されるようになったのは1980年頃である。それまでは成人看護学の中に含まれており、老人看護学として成人看護学から独立したのは1990年の基礎看護教育カリキュラム改正時である。この改正で、老人看護が学問として確立する速さが加速化し、1995年に日本老年看護学会が発足した。1996年に保健婦助産婦看護婦養成所指定規則の一部が改正され、老人看護学から老年看護学へと改められた²⁾。

老年看護学で大切なことは、高齢者の尊厳を守り、生活史を把握し、その延長で生活ができるよう支援することである。患者の権利擁護については、1991年にリスボ

ンで第34回世界医師会総会が開催され、そこで採択された「患者の権利に関するリスボン宣言」が基本とされている³⁾。また、高齢者のQOLを高めるケアについては、1991年に国連総会で決議された「高齢者の国連原則」が基本的姿勢とされている。その中でうたわれている原則は、①尊厳の原則、②自己実現の原則、③参加の原則、④自立の原則、⑤ケアの原則の5つである²⁾。高齢者ケアの基本的姿勢や看護の質には看護者が持つ高齢者イメージが関連していると言われている。

しかし、超高齢社会に突入しようとしている一方で、学生を取り巻く背景は、核家族化が進み、高齢者との接触がない学生が増加してきている。このような学生が、高齢者を理解し、高齢者の尊厳を踏まえた看護が思考できるために、高齢者イメージをよりよく形成していくことは難しい。

本学における現行の老年看護学の科目構成を図1に示した。1年次後期の「発達看護論Ⅱ」(1単位、30時間、オムニバス)では老年看護学概論を15時間学習する。2年次前期の「発達看護論Ⅳ演習」(1単位、30時間)では老年期の成熟と衰退について学び、同じく2年次前期の「臨床看護論Ⅱ」(1単位、30時間、オムニバス)では老年看護学の理論と考え方を15時間学習する。3年次前期に「老年臨床看護演習」(30時間、1単位)を通して理論と看護技術を結びつけて学習する。同じく、3年次前期の「発達看護論実習」(2単位、90時間)では、高齢者の成熟と衰退の理解と対応方法について学習し、3～4年次の「老年臨床看護論実習」(2単位、90時間)では、それまでに学んだ知識と技術を統合して看護過程を展開する。さらに、4年次前期の「統合実習」(3単位、135時間)では、実習全体を通しての課題を明確にし、課題追求のために学生自らが実習計画をたて看護実践をする。

2009年9月30日受付、2010年1月9日受理

連絡先: 畑野 相子

滋賀県立大学人間看護学部

住所: 彦根市八坂町2500

e-mail: ahatano@nurse.usp.ac.jp

各年次における教育プログラムが、学生の高齢者イメージにどのような影響しているかを把握していく必要がある。そして、4年間を通して、看護学生の高齢者イメージの構築過程とそれに関連する教育内容を明らかにすることは、カリキュラム改正を目前にした現在、大変意義のあることと考える。そこで、本研究では、その第1報として、1年次から2年次の学生の高齢者イメージの変遷過程を把握し、教育内容と高齢者イメージの関連を明確にすることを目的として検討をした。

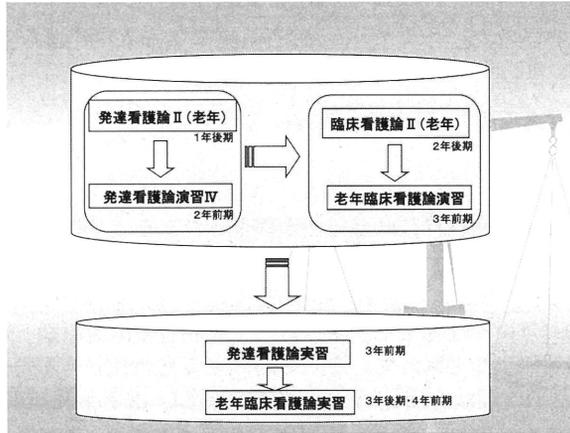


図1 老年看護学の科目構成

表1 1・2年次における老年看護の授業内容

科目	1年次	2年次	
	発達看護論Ⅱ (オムニバス)	発達看護論演習Ⅳ	臨床看護論演習Ⅱ (老年) (オムニバス)
老年期にある人の心身の変化および社会的状況を理解し、健康段階に応じたケアを実践し、高齢者のQOLを高める看護を学ぶ	高齢者の成熟と衰退に関するアセスメント能力を高め、健康段階に応じた健康の保持増進、QOLの向上を目指した支援を考える。理論学習を基盤として、講義、演習、事例検討等を通して学習を深める。	老年の特有的病態を理解し、急性期・慢性期・回復期における生活上の問題点、QOLを高めるための看護援助の方法について学ぶ。	
1 老年看護の概念	心身の機能の特徴 ①薬用症候群 ②日常生活動作の把握と評価	老年看護の理念と健康問題を持つ高齢者の理解	
2 人口の高齢化と諸問題	身体的特徴の理解 シニア体験	脳血管疾患を有する高齢者の病態と援助方法1	
3 高齢者の理解(1)身体的・生理的・心理的側面	精神的機能の特徴とアセスメント ①老いの受容と適応 ②加齢に伴う精神③精神機能の評価	脳血管疾患を有する高齢者の病態と援助方法2	
4 高齢者の理解(2)発達段階的側面・社会的側面	課題を教材に「心身の機能の特徴」について討議	骨・関節系疾患を有する高齢者の病態と援助方法1	
5 高齢者の健康段階に対応した看護	コミュニケーション技法	骨・関節系疾患を有する高齢者の病態と援助方法2	
6 我が国の高齢者保健医療・福祉対策	食事のアセスメントと援助技術 ①食べることの意義 ②嚥下のステージ ③力筋と食機能 ④おいしく食べるための条件と看護	慢性心不全を有する高齢者の病態と援助方法1	
7 高齢者看護に用いられる理論	排泄のアセスメントと援助	介護保険等各種サービス利用と家族支援	
8	睡眠のアセスメントと援助		
9	心の健康を高める支援-代替療法- ①回想法②笑いのセラピー		
10	転倒の特徴と予防		
11	生活リハビリテーション、ICFとICIDH		
12	認知症の理解(1)		
13	認知症の理解(2) ビデオフォーラム		
14	アクティビティケアの基本と実際		
15	高齢者の健康問題の現状と課題		

II. 研究方法

1. 調査対象

本学人間看護学部の2008年度入学生60人を対象とした。

2. 研究期間

2008年11月から2009年7月

3. 調査方法

研究スタイルは調査研究とし、4回調査を実施した。調査時期は、1年次後期の授業である「発達看護論Ⅱ」の授業開始前と終了時(2008年11月と2009年1月)、2年次前期の授業である「発達看護論演習Ⅳ」と「臨床看護論Ⅱ(老年)」の授業開始前と終了時(2009年4月と同年7月)とした。授業前の調査は、当該科目の第1回授業を開始する前に調査用紙を一斉配布し、記入してもらい、その場で回収した。また、終了時の調査は、当該科目の第15回授業終了時に、調査用紙を一斉に配布し、その場で回収した。

4. 調査内容

授業開始前の調査内容は、対象者の基本的属性、高齢者イメージ形成に影響すると思われる個人的要因として高齢者との生活体験、高齢者に対するイメージとした。授業終了時の調査内容は、授業前に実施した調査内容に、老年看護学に対する興味・関心、授業内容とイメージ変化、授業に対する感想を加えた。高齢者イメージについて、保坂⁴⁾らは高齢者イメージをあらゆる50の形容詞を精選している。その後、小泉⁵⁾や大谷⁶⁾や守屋⁷⁾らの研究により高齢者イメージが修正されているが、定まったものはない。そこで、高齢者イメージをあらゆる形容詞として、大塚⁷⁾らが研究に用いている一般的によく用いられている15項目を用いた(図2)。イメージ測定のスケールについては、Semantic Differential Method(意味的微分法、以下SD法とする)を用いた。「評点6」に「尊敬できる」「役に立つ」などの肯定的表現を、「評点1」に「尊敬できない」「役に立たない」などの否定的表現を6段階評価とした。老年看護学に対する興味・関心については、Visual Analogue Scale(以下VAS法とする)を用いた。授業内容とイメージ変化については、授業内容を代表するキーワード15個を精選し、それらの内容が高齢者イメージに肯定的に影響したのか否定的に影響したのかをVAS法を用いて測定した。

5. 分析方法

各年次における講義・演習の前後のイメージの変化およびそれに影響する要因を分析した。①属性とイメージの関連には χ^2 検定、Kruskal Wallis検定、Mann-

	6	5	4	3	2	1	
・尊敬できる							・尊敬できない
・役に立つ							・役に立たない
・好き							・嫌い
・明るい							・暗い
・積極的							・消極的
・さっそうとしている							・みじめ
・強い							・弱い
・あたたかい							・冷たい
・優しい							・厳しい
・上品							・下品
・思いやりがある							・思いやりがない
・プライドが高い							・プライドが低い
・きれい							・汚い
・素直							・頑固
・考えが新しい							・考えが古い

図2 高齢者イメージ

Whitney検定を用いた。②学習前後のイメージの変化の検定には、Wilcoxonの符号付き順位検定を用いた。③学習内容が高齢者イメージに及ぼす影響と老年看護学に対する興味関心との関連の検定には一元配置分散分析を用いた。統計ソフトはSPSS 14.0j for Windowsを用い、有意確率は5%以下とした。

6. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究の意義、目的、方法を文書により説明した。併せて、参加は自由であること、参加を拒否しても不利益を被ることはないこと、参加を途中で中止することも可能であること、成績とは一切関係がないこと、調査内容は目的以外に利用しないこと、結果を論文として発表するに当たっては個人が特定される記載は一切しないこと、終了後は情報を破棄することを伝え、同意を得た。同意が得られた学生には回答してもらい、同意が得られなかった学生には白紙にて提出してもらった。

なお、実施にあたっては滋賀県立大学研究に関する倫理審査委員会の承認を得た。(2008年11月18日、第88号)

III. 結果

1. 対象者の属性

回収数は59人(回収率98.3%)であった。そのうち同居経験がある学生は22人(37.3%)であった。高齢者と話す機会が「よくある」と回答した学生は、1年次で11人(18.6%)、2年次で14人(23.7%)であった。同居しているあるいは同居経験がある学生のうち、話す機会が「よくある」と回答した学生は9人(40.3%)であった。

表2 同居経験の有無

(単位 人)

	人数	割合
同居している	15	25.4%
同居していない	35	59.3%
過去にしていた	7	11.9%
その他	2	3.4%
合計	59	100.0%

表3 高齢者と話す機会

(単位 人)

	1年次		2年次	
	人数	割合	人数	割合
よくある	11	18.6%	14	23.7%
時々ある	26	44.1%	22	37.3%
ほとんどない	19	32.2%	22	37.3%
全くない	3	5.1%	1	1.7%
合計	59	100.0%	59	100.0%

2. SD法による高齢者イメージ

1年次・2年次における授業開始前と終了時の高齢者イメージは表5に示した。

1年次における授業開始前と終了時の高齢者イメージ変化では、「さっそうとしているーみじめ」の項目は授業開始前より授業終了時の方が低得点になっていたが、それ以外の項目はすべて授業開始前より授業終了時の方が高得点であった。その中でも「強いー弱い」「素直ー頑固」「考えが新しいー古い」の3つイメージにおいて、授業開始前より授業終了時の方が有意に高得点であった。2年次における授業開始前と終了時の高齢者イメージ変

表4 同居と話す機会の関連

単位：人()は%

	よくある	時々ある	ほとんどない	全くない	有意確率
同居中又は同居経験あり	9(40.3%)	11(50.0%)	2(9.1%)	0(0%)	P=0.001
同居経験なし	2(5.4%)	15(40.5%)	17(45.9%)	3(8.1%)	

化では、「明るいー暗い」「さっそうとしているーみじめ」「強いー弱い」「優しいー厳しい」「きれいー汚い」「考えが新しいー古い」の6つのイメージにおいて、授業開始前より授業終了時の方が高得点であったが、有意な差は見られなかった。その他の高齢者イメージは、授業開始前より授業終了時の方が低得点であった。

1年次における授業開始前と2年次の授業終了時のイメージを比較すると、「強いー弱い」「プライドが高いー低い」「素直ー頑固」「考えが新しいー古い」の4つのイメージにおいて、1年次の授業開始前より2年次の授業終了時の方が高得点であった。その他の高齢者イメージは、すべて2年次の授業終了時の方が低得点であった。

表5 各年次における高齢者イメージの評価

イメージ	1年次					2年次				
	授業前		授業後		有意確率	授業前		授業後		有意確率
	点数	標準偏差	点数	標準偏差		点数	標準偏差	点数	標準偏差	
① 尊敬できる	4.93	0.80	5.00	0.70		4.83	0.72	4.71	0.75	
② 役に立つ	4.33	0.93	4.37	0.82		4.13	0.92	4.01	0.97	
③ 好き	4.59	0.81	4.74	0.65		4.61	0.74	4.57	0.74	
④ 明るい	4.35	0.65	4.41	0.79		4.21	0.69	4.22	0.82	
⑤ 積極的	3.76	1.10	3.92	0.86		3.79	0.97	3.70	0.87	
⑥ 颯爽としている	3.93	0.87	3.80	0.90		3.57	0.86	3.70	0.77	
⑦ 強い	3.20	1.31	3.60	1.23	*	3.33	1.13	3.59	1.04	
⑧ あたたかい	4.98	0.71	5.00	0.87		4.91	0.78	4.68	0.92	
⑨ 優しい	4.80	0.83	4.87	0.95		4.64	0.98	4.53	0.95	
⑩ 上品	4.15	0.68	4.20	0.71		4.16	0.84	3.97	0.88	
⑪ 思いやりがある	4.63	0.81	4.69	0.77		4.60	0.91	4.50	0.98	
⑫ プライドが高い	4.09	0.97	4.28	1.03		4.49	0.91	4.49	0.87	
⑬ きれい	3.83	0.61	3.93	0.60		3.72	0.69	3.86	0.74	
⑭ 素直	2.89	1.04	3.30	0.93	**	3.09	1.22	3.07	1.10	
⑮ 考えが新しい	2.26	0.86	2.66	1.00	**	2.48	0.99	2.69	0.89	

(注) 点数が高いほど肯定的イメージ

3. 属性と高齢者イメージとの関連

同居経験、話す頻度と高齢者イメージとの関連はみられなかった。

4. 授業内容と高齢者イメージとの関連

1) 1年次における教育内容と高齢者イメージの関連は表6に示した。これは、授業内容を表すキーワード①から⑮が、学生の高齢者イメージに「変化なし」を中心におき、肯定的に影響した場合を「+」、否定的に影響した場合を「-」として、VAS法で評価したものである。100mm否定的になったと回答した学生(-100と表示)から、100mm肯定的になったと回答した学生(+100と表示)があった。平均値を見ると、否定的イメージに影響していた授業内容は4つあり、否定的影響が大きい順に「高齢者虐待」「身体拘束」「生活不活発病」「身体的変化」であった。肯定的イメー

ジに影響した授業内容は11で、肯定的影響が大きかった上位3つの授業内容は「健康づくり」「福祉対策」「介護保険法」であった。

2) 2年次における授業内容と高齢者イメージの関連については表7に示した。これは、2年次前期の「発達看護論演習Ⅳ」の授業内容①から⑮が、学生の高齢者イメージに肯定的に影響したか否定的に影響したかを人数で示したものである。高齢者イメージに肯定的に影響したと70%以上の学生が回答した授業内容は、「アクティビティケア」「笑いのセラピー」「認知症の理解」であった。逆に、高齢者イメージに否定的に影響したと30%以上の学生が回答した授業内容は、「摂食・嚥下」「排泄」「廃用症候群」「シニア体験」であった。

3) 2年次における「発達看護論演習Ⅳ」の授業内容に対する興味・関心を表8に示した。これは、授業終了

表6 1年次における授業内容と高齢者イメージの関連

N=59

授業内容	最小値	最大値	平均値	標準偏差
① 平均寿命	-42	100	30.98	40.78
② 加齢	-100	100	23.09	47.41
③ 老化	-100	100	10.14	47.79
④ 身体的変化	-100	100	-5.8	50.36
⑤ 精神的变化	-100	100	7.66	53.08
⑥ 高齢者心理	-96	100	15.22	46.36
⑦ 老いへの適応	-56	100	25.93	45.06
⑧ 高齢者の健康	-100	100	18.48	48.82
⑨ 健康づくり対策	-30	100	53.36	36.82
⑩ 福祉対策	-100	100	36.98	45.58
⑪ 介護保険法	-100	100	32.2	49.38
⑫ 高齢者看護と理論	-100	100	12.34	46.28
⑬ 身体拘束	-100	100	-30.78	59.47
⑭ 高齢者虐待	-100	100	-41.97	59.27
⑮ 生活不活発病	-100	100	-26.85	54.42

表7 2年次における授業内容と高齢者イメージの関連

N=59

授業内容	肯定的に影響		否定的に影響		影響なし	
	実数 (人)	(%)	実数 (人)	(%)	実数 (人)	(%)
① ADL・IADL評価	31	47.7	7	10.8	16	24.6
② シニア体験	29	44.6	21	32.3	5	7.7
③ 摂食・嚥下	16	24.6	23	35.4	15	23.1
④ 排泄アセスメント	22	33.8	22	33.8	11	16.9
⑤ 精神機能の特徴	34	52.3	9	13.8	11	16.9
⑥ 回想法	45	69.2	1	1.5	9	13.8
⑦ 笑いのセラピー	50	76.9	0	0	5	7.7
⑧ ICF	31	47.7	1	1.5	22	33.8
⑨ 転倒予防	30	46.2	9	13.8	16	24.6
⑩ 廃用症候群	22	33.8	21	32.3	12	18.5
⑪ 認知症の理解	40	61.5	9	13.8	6	9.2
⑫ 認知症のビデオ	46	70.8	4	6.2	5	7.7
⑬ 高齢者インタビュー	45	69.2	1	1.5	9	13.8
⑭ 睡眠の特徴	25	38.5	14	21.5	16	24.6
⑮ 生活リハビリ	28	43.1	7	10.8	20	30.8
⑯ アクティビティケア	50	76.9	0	0	5	7.7

後に興味・関心が「全くなし」を「0」とし、「大いにある」を「100mm」とし、VAS法で測定したものである。興味・関心は、全くないの「0」から大いにあるの「100mm」までの幅がみられた。平均値でみ

ると、興味・関心が70mm以上の授業内容は、「笑いのセラピー」「認知症の理解」「回想法」「アクティビティケア」「シニア体験」であった。

4) 2年次における「臨床看護論Ⅱ(老年)」の授業内

表8 学習内容に対する興味関心

授業内容	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
① ADL・IADL評価	54	10	90	57.85	17.60
② シニア体験	55	17	99	75.44	17.33
③ 摂食・嚥下	54	24	100	63.98	16.97
④ 排泄アセスメント	55	11	100	60.07	17.73
⑤ 精神機能の特徴	52	5	100	68.25	20.16
⑥ 回想法	55	0	100	77.82	18.53
⑦ 笑いのセラピー	55	30	100	80.98	16.48
⑧ ICF	55	11	100	62.05	19.42
⑨ 転倒予防	55	28	100	68.11	16.91
⑩ 廃用症候群	54	9	100	67.37	20.18
⑪ 認知症の理解	53	49	100	78.55	15.26
⑫ 認知症のビデオ	55	19	100	79.96	17.21
⑬ 高齢者インタビュー	55	40	100	71.76	17.69
⑭ 睡眠の特徴	55	48	100	64.51	14.54
⑮ 生活リハビリ	55	27	100	62.91	15.98
⑯ アクティビティケア	55	49	100	76.29	15.76

容と高齢者イメージとの関連を表9に示した。肯定的イメージに影響した内容は、自力で努力する高齢者の姿勢や援助の可能性等であった。否定的イメージに影響した内容は、身体機能の低下や病気等が多くなること等であった。

する興味関心度を表10に示した。これは、老年看護学に対する興味・関心が「全くない」を「0mm」とし、「大いにある」を「100mm」とし、VAS法で測定したものである。授業後の興味・関心は平均73.44mmであり、老年看護学に対する興味・関心は授業開始前に比べて授業終了時の方が有意に長くなっていた。

5. 老年看護学に対する興味・関心度

2年次における授業開始前と終了時の老年看護学に対

表9 臨床看護論Ⅱ(老年)が高齢者に及ぼす影響

肯定的イメージに影響した内容	否定的イメージに影響した内容
<ul style="list-style-type: none"> ・高齢であっても援助でよくなることができる ・援助の工夫をすれば、できないとかがえられることでも出来るようになること ・自発的に排尿しようとしていたり、すべての介助を必要としない姿勢(3件) ・認知について ・積極的に治療する姿勢 ・素直さ ・自力で試みる姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者は転倒リスクが高いこと(3件) ・病気が多いこと(6件) ・身体的に弱ってきているから、すぐに怪我をしたり、病気をしたりする ・廃用症候群(2件) ・さまざまな喪失体験があること ・筋力低下(4件) ・排泄の援助を受けることで、自分を否定的に考えることがあること ・自尊心を失いがちになること(2件) ・1つの病気から様々な病気を引き起こしやすい ・老化(2件) ・看護問題で起こりうるさまざまなリスク ・機能低下 ・セルフケア不足 ・病気をした後、弱気になる

表10 2年次における学習内容に関する関心度の変化

	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	有意確率
授業前の興味・関心	68.74	20.48	2.79	P=0.042
授業後の興味・関心	73.44	18.05	2.46	

N=54

6. 授業内容が高齢者イメージに与える影響

授業内容が高齢者イメージに与える影響を表11に示した。授業内容が、高齢者イメージに肯定的に影響したのか、否定的に影響したのかをVAS法で測定し、平均値を示したものである。「認知症の理解」の授業内容は、高齢者イメージに肯定的な影響が有意に認められた。「摂食・嚥下」の授業内容は、高齢者イメージに否定的な影響が有意に認められた。

IV. 考察

老年看護実践に高齢者イメージが関連していると言われていることから、よりよい高齢者イメージを形成することが老年看護の質に影響する。そこで、第1段階として、1年次から2年次にかけての学生の高齢者イメージの形成過程と高齢者イメージに影響する要因について考察した。

1. 学生の高齢者イメージの実態

表5より、1年次から2年次にかけての高齢者イメージを示す形容詞対4点以上は、1年次の授業開始前と終了時とも「尊敬できるーできない」「役に立つー立たない」「好きー嫌い」「明るいー暗い」「あたたかいー冷たい」「上品ー下品」「思いやりがあるーない」「プライドが高いー低い」の9項目で、2年次の授業開始前も同様の9項目だったが、授業終了時は「上品ー下品」が3点

台になり8項目になっていた。2年次の授業終了時に「上品」が3点台になっていたが、1年次から2年次にかけての肯定的高齢者イメージは、あまり変化しないことが示唆された。大谷⁶⁾らが報告している大学生の高齢者イメージは、「消極的」「弱い」「頑固」「考えが古い」の4項目が2点台であり、「あたたかい」「積極的」「好き」「プライドが高い」の4項目が4点台を示している。これと比較すると、本学の学生の高齢者イメージの方が肯定的と言える。肯定的イメージ内容を分析すると「尊敬できる」「役に立つ」「好き」は、高齢者を概観し評価的にみて形成されるイメージである。また、「あたたかい」「上品」「思いやりがある」は高齢者としての円熟性を感じて形成されるイメージである。「明るい」は高齢者の活動性から形成されるイメージである。「プライドが高い」は高齢者と接してその関係性の中で形成されるイメージである。逆に、高齢者イメージを示す形容詞対3点以下は、「積極的ー消極的」「さっそうとしているーみじめ」「強いー弱い」「きれいー汚い」「素直ー頑固」「考えが新しいー古い」の6項目であった。すなわち、学生が抱いている高齢者イメージは、「消極的」「みじめ」「弱い」「汚い」「頑固」「考えが古い」と否定的に傾いているといえる。否定的イメージ内容を分析すると、「消極的」「みじめ」「弱い」は高齢者の活動性から形成されるイメージである。「汚い」は、高齢者を概観して形成されるイメージである。「頑固」「考えが古い」は、高齢者と接して、その関係性の中で形成されるイメージである。以上

表11 授業内容が高齢者イメージに与える影響と老年看護学に対する興味に関連

		平均値	度数	標準偏差	有意確率			平均値	度数	標準偏差	有意確率
ADL,IAD L評価	肯定的	75.55	31	15.37	p=0.04	転倒予 防	肯定的	75.63	30	14.44	
	否定的	73.29	7	22.88			否定的	75.00	9	23.29	
	影響なし	70.63	16	20.40			影響なし	68.19	16	20.48	
シニア体 験	肯定的	70.52	29	17.63		廃用症 候群	肯定的	71.50	22	14.99	
	否定的	79.10	21	16.10			否定的	76.24	21	21.27	
	影響なし	65.80	5	23.39			影響なし	71.75	12	17.15	
摂食・嚥 下	肯定的	71.63	16	15.31	p=0.04	認知症 の理解 (1)	肯定的	73.13	40	16.17	
	否定的	79.43	23	17.98			否定的	68.33	9	26.03	
	影響なし	64.73	15	17.58			影響なし	82.50	6	13.69	
排泄アセ スメント	肯定的	71.23	22	18.58		認知症 の理解 (2)	肯定的	73.67	46	16.09	p=0.01
	否定的	75.05	22	20.64			否定的	52.25	4	27.77	
	影響なし	74.27	11	9.57			影響なし	87.40	5	11.70	
精神機能 の特徴	肯定的	74.44	34	12.97		高齢者イ ンタ ビュー	肯定的	73.69	45	17.72	
	否定的	72.89	9	28.46			否定的	76.00	1		
	影響なし	72.55	11	21.58			影響なし	71.44	9	20.67	
回想法	肯定的	74.73	45	16.19		睡眠の 特徴	肯定的	71.28	25	16.83	
	否定的	98.00	1				否定的	80.86	14	19.66	
	影響なし	63.78	9	23.02			影響なし	70.06	16	17.11	
笑いのセ ラピー	肯定的	73.12	50	18.64		生活リハ ビリ	肯定的	77.14	28	18.00	
	影響なし	75.80	5	7.60			否定的	66.71	7	23.51	
	肯定的	77.23	31	16.01			影響なし	70.40	20	15.11	
ICF	肯定的	75.00	1			アクティ ビティ	肯定的	74.22	50	17.80	
	影響なし	68.91	22	19.70			影響なし	64.80	5	18.38	

のことから、学生の高齢者イメージ形成は、評価的に概観して形成されるイメージは肯定的となり、逆に、活動性から形成されるイメージは否定的となっていることが示唆された。また、「素直ー頑固」「考えが新しいー古い」「プライドが高いー低い」など高齢者と接し、その関係性の中で感じるにより形成されるイメージは、どのような高齢者と接するかにより肯定的にも否定的にもなると考えられる。

1年次において、授業開始前より授業終了時に有意に高得点になっていた形容詞対は「強いー弱い」「素直ー頑固」「考えが新しいー古い」であった。この3項目は、有意に高得点に変化していたが、「強いー弱い」「素直ー頑固」の平均点は3点台、「考えが新しいー古い」の平均点は2点台で、否定的イメージに傾いている。「強いー弱い」は、活動性から形成されるイメージである。「素直ー頑固」「考えが新しいー古い」は、高齢者と接し、感じる中で形成されるイメージである。学生が高齢者をイメージする場合、思い浮かべるのは「祖父母」が約7割であるとの先行研究があるように⁸⁾、祖父母の影響が大きい。しかし、同居経験や話す頻度と高齢者イメージにおいて関連は見られなかった。

1年次の授業開始前と2年次の授業終了時の高齢者イメージを示す形容詞対を見ると、「素直ー頑固」が2点台から3点台になり、「上品ー下品」が4点台から3点台になっているが、有意な差はなかった。古城ら⁹⁾の研究においては「やさしい」「強い」というイメージが有意に高くなったと報告されている。「素直ー頑固」「上品ー下品」は高齢者と接する中で円熟性を感じるにより形成されるイメージである。1年次と2年次にける教育プログラムは、学内における授業形態が主流であり、高齢者との交流体験は少ないことや同居経験、話す機会の少なさが高齢者イメージ形成に影響していると考えられる。

2. 高齢者イメージに影響する要因、

1) 祖父母との交流と高齢者イメージの関連

高齢者のイメージ形成に、中野ら¹⁰⁾は祖父母との過去の経験が重要であると述べている。大谷ら⁸⁾による調査では、学生が高齢者と聞いて思い浮かべる人は、「祖父母」が約7割であると報告している。また、渡辺ら⁹⁾の調査研究でも高齢者イメージと祖父母との会話頻度が主要な要因であったと報告している。しかし、今回の調査では、1年次における授業前的高齢者イメージと祖父母との同居経験や話す頻度との関連は見られなかった。先行研究と異なる結果だったのは、今回の調査では、同居経験の有無や話す頻度という形態しか質問できていないことが要因と思われる。祖父母の年齢や健康状態が学生の高齢者イメージに影響を

及ぼす¹⁰⁾といわれているが、今回の研究ではそこまで言及していない。祖父母の健康状態や、どのような内容の会話をしているのかなど、同居状況や話す内容など質の面と高齢者イメージの関連を追求していくことが必要である。

2) 授業内容と高齢者イメージの関連

授業内容が高齢者イメージに与える影響は、学生により大きな幅があることがうかがえた。1年次において高齢者の否定的イメージに影響した主な内容は、「高齢者虐待」「身体拘束」「生活不活発病」であり、肯定的イメージに影響した主な内容は、「健康づくり施策」「介護保険制法」「平均寿命」などであった。否定的イメージに影響した授業内容の共通性は、加齢に伴う心身の衰退がイメージ化しやすいことである。肯定的イメージに影響した内容の共通性は、保健福祉施策や制度など高齢者を中心に据えた社会的環境である。平均寿命と環境との関連や、制度や施策は人が創るものであることから、心身の機能が低下しても保健福祉が充実すれば希望がもてるという気持ちに繋がり、それが肯定的イメージに関連したと考えられる。高齢者イメージの形容詞対において1年次の授業前より授業後で有意に高得点だった項目は、「強いー弱い」「素直ー頑固」「考えが新しいー古い」である。心身の衰退を学び、否定的イメージが優位になったり、社会施策等を学び肯定的イメージになったりしながら、高齢者イメージが形成とされていることが示唆された。

2年次において高齢者の否定的イメージに影響した主な内容は、「摂食・嚥下」「排泄」「シニア体験」等であった。肯定的イメージに影響した主な内容は、「笑いのセラピー」「アクティビティケア」「高齢者インタビュー」「認知症の理解」等であった。嚥下障害や排泄障害は、加齢に伴う身体機能低下を踏まえて学ぶ内容である。心身機能低下を実感することで、高齢者イメージが否定的になると言える。「笑いのセラピー」「アクティビティケア」は、高齢者の心身機能の向上を目指した支援内容であり、実際に体験すると高齢者でなくても楽しいものである。楽しいという感情が肯定的イメージに影響すると考える。米山¹¹⁾は楽天的なことを考えるとポジティブ思考になると述べている。楽しい要素をいれた授業組み立てをすることの大事さが示唆された。また、「高齢者インタビュー」は直接高齢者との会話を余儀なくされる。高齢者との同居体験や話す機会が少ない学生にとって、インタビューから、予想以上の活動性や円熟性に触れたのではないかと推測する。そのことが、肯定的な高齢者イメージにつながったと考える。高齢者と接する機会を通して、学生自らが感じる中で高齢者イメージは形成されることが示唆された。

3) 授業が高齢者イメージに及ぼす影響と老年看護学に対する興味・関心の関連

「摂食・嚥下」の授業から高齢者を否定的にとらえている学生の方がそうでない学生より老年看護学に対する興味関心は有意に強かった。また、「認知症の理解」に関する授業から、高齢者を肯定的に受け止めている学生の方がそうでない学生より老年看護学に対する興味関心は有意に強かった。学習意欲は、内発性、自律性、価値志向性という特性を備えたものであるといわれている¹⁴⁾。単に、高齢者イメージに肯定的に影響することが学習への関心につながるわけではない。なぜ機能低下するのか、支援の方法によって可能性は大きくもなるし小さくもなるという価値指向性や内発性が学生の中に芽生えることが学習意欲を喚起する。まずは、学生自身が「今の自分にとって、老いとは何か」「今の自分は高齢者をどう感じているのか」という率直な自己表出を行うことが内発性を高める第1歩であると考え。教育するうえで、否定的イメージを肯定的イメージに変えることを重視するのではなく、なぜそのように感じるのかということを生徒自身にフィードバックして、学生自身が自己の高齢者イメージの形成過程を踏むことにより、学習意欲が喚起されると考える。

V. 結論

1. 高齢者イメージについて

- 1) 高齢者イメージと同居経験や話す頻度との関連は認められなかった。
- 2) 1年次における授業開始前と終了時のイメージ評価は、「素直—頑固」「考え方が新しい—古い」の形容詞対が有意に高かった。2年次における授業開始前と終了時のイメージ変化に有意な差はなかった。1年次から2年次にかけての高齢者イメージは、あまり変化しないことが示唆された。

2. 授業内容と高齢者イメージの関連

- 1) 施策や支援等、創造の可能性のある内容は肯定的イメージに影響し、加齢に伴う心身機能低下に関する内容は否定的イメージに影響する。心身の衰退を学び、否定的イメージが優位になったり、社会施策等を学び肯定的イメージになったりしながら、高齢者イメージが形成されていることが示唆された。
- 2) 授業内容が高齢者イメージに及ぼす影響は個人差が大きい。
- 3) 高齢者イメージと学習への関心には関連は見られなかった。学習意欲の喚起には、なぜそのようなイメージを持つのかを学生自身が自分に問いかけることの重

要性が示唆された。

VI. おわりに

超高齢社会を迎え、老年人口は増加している。加齢に伴い心身機能は低下することから、高齢者に対する看護や介護の必要性は増している。看護実践をするにあたり、高齢者との接触が希薄になりつつある学生に、高齢者を理解してもらうためには様々な工夫が必要である。そして、学生自身が「今の自分にとって、老いとは何か」を考えたり、自身の高齢者観を持つことが重要である。

1年次から2年次は学内における講義と演習が中心である。その中で学生のイメージがどのように変化するか確認してきた。3年次からは専門教育や実習が導入される。学生がどのような高齢者観を形成していくのか見届けていきたい。

加齢にともなう高齢者の身体的な機能低下の面ばかりでなく、高齢者のポジティブな面、成熟面、生活の中で培ってきた生きる力を学生に感じてもらいたいと願っている。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただきご協力いただいた学生の皆様に深謝いたします

文献

- 1) 国民衛生の動向：厚生統計協会, 2008年第55号第9号
- 2) 奥野茂代, 大西和子：老年看護学, 概論と看護の実践, HIROKAWA, 2009
- 3) 世界医師会：患者の権利に関するリスボン宣言, 1981年総会で採択, 1995年総会で修正
- 4) 保坂久美子, 袖井孝子：大学生の老人イメージ, 社会老年学(27), 22~23, 1988
- 5) 小泉美佐子, 上本純子：看護学生の老人イメージ, Semantic Differential法による分析, 筑波医短大研報, No11 33-39 1990
- 6) 大谷英子, 松本光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究, 日本看護研究学会雑誌, Vol18, No 4 1995
- 7) 守屋滝乃, 稲垣宣子, 鈴木偉代他：老人に対する意識調査, 看護教育(28), 539, 1987
- 8) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井百合子：看護学生の老人に対するイメージに関する研究, 老年看護学Vol 1, 1999
- 9) 古城幸子, 木下香織, 馬本智恵：老年看護学の授業に

- よる学生の高齢者イメージの変化, 新見公立短期大学紀要, 第24巻, p25-33, 2003
- 10) 中野いく子: 児童の老人イメージ, 老年社会学(34), 23-35, 1992
 - 11) 大谷英子, 松本光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究, 日本看護研究学会雑誌Vol18, No 4, 1995
 - 12) 渡辺裕子, 倉田トシ子, 森田祐代: 看護学生の高齢者イメージに関する研究, 山梨県立大学看護大学短期大学部紀要Vol11, No14, 2005
 - 13) 米山公啓: 脳の地図帳. 青春出版社, 2009
 - 14) 杉森みど里, 舟島なをみ: 看護教育, 医学書院, 2009

(Summary)

Factor that geriatric nursing education programs influence on elderly people image formation of nursing students (The first report) -Relation with nursing course and elderly people image of freshman and sophomore-

Hatano Aiko, Kitamura Takako, Yasuda chizu

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

Key Words image of the elderly, nursing students, geriatric nursing, learning program